



1989年(平成元年)
6月号(No. 528)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- 昨今の異常気象と高山植物
白旗史朗……………(1)
海外の山……………(2)
「ツェルマットのガイド問題」
「困難な登山をする者の危険と
死との関係(3)」
第6回国際低酸素症シンポジウ
ムに参加して
中島道郎……………(5)
日本山岳協会本年度展覧案内……………(5)
会員アンケート結果報告(1)……………(6)
図書紹介……………(9)
「極楽トンボ・ヒマラヤに眠る」
「家族ハイク・九州北部の山」
「西望祁連」 「ロック・アラウン
ド・ザ・ワールド」
自然保護随想……………(11)
絵画展案内 2件……………(12)
報告……………(12)
山陰支部、青懸・婦懸・指導委
山日記休刊のお知らせ……………(12)
会務報告・ルーム日誌・会員異動
……………(13)
図書受入報告 図書委員会……………(14)

▶日本山岳会事務取扱時間

月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時

日曜・祭日は休み

▶図書室開室時間

日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテブ電話

234 六六五九

昨今の異常気象と高山植物

白旗史朗

今年は冬らしく、カッチリと寒気に

引きしまった日がほとんどなかった。

そう考えると、「そうだ、昨冬も、その前の冬もおんなじだった」と、過ぎ去った日々に想いが至る。

私たちが子供のころ、手足にひび、あかぎれを作って、その痛さに泣いた寒さ。だが、いまの子供たちにはそういったこともなく、ひび・あかぎれがどういったものであるかも知らず、その名を知ってもいないだろう。

また、まだ前途に光明の見い出せなかった二十歳代の冬の、思わず身ぶるいするほど冷たかった風。そういった寒さや冷たさは、いったいどこに消え

てしまったのだろうか？

いつも私はそう思い、それに付随するさまざまなことに、その答えを見つけてようとする。

暖冬異常といい、冷夏現象という、いわゆる異常気象が人々の口にのぼったのはいつごろだったか、それはもう、久しい昔のこととなった。最近ではいつとき時候のあいさつに話題となるくらいで、それも真剣に論じられるということもない。もう、誰もが慣れたことになってしまっていて、最初のころのように心から憂うという人も少なくなかった。

こうした現象、いわゆる異常気象が

ひんぴんとあらわれるようになった原因については、種々論議が交され、一部対策も唱えられているが、残念ながらにまだ結論が出ず、対策も実行されていない。

一説には、地球はいま温暖化への過程にあるという。暖冬という一現象だけから見るとたしかにそう思える。しかし、それならなぜ冷夏があり、春遅くや秋早くに降雪があるのか、といった逆の現象に説明がつきにくい。

また、別の説では間氷期から次の氷期に向っているともいい、これに対しても前者と同様な矛盾があつて、いっ

こうに決着がつかない。
雨や雪は降りはじめると止めどがなくなり、降らないとなると冬も夏もカラカラ陽気である。晴れ上がった青空の日がすくなく、夕方の雲は沈まずに立ち昇りつづけ、ひっきりなしに台風が

しだいに近づいて行く。また、五日目ごとに風が吹き、十日目ごとにお湿り、つまり雨が降るといふ、こうしたことばを軸として、日本ではその四季がくりかえされてきた。こうした自然の摂理にしたがうところに、古くから人類の生活が成立していたのであるが、それが現在では失われてしまったといつてよい。この原因について、私は人類すべてに大きな責任があると考えている。

昨今の物質文明の急速な台頭・発展はまことにめざましい。かつて中世においては人間の情緒・心情を形成する文化と、物質文明とは足なみをそろえていたように思うが、最近では文化が置き去られ、文明だけが先行している。近々百年の間に、人類は発生から現在までの数百万年間の数百倍はおろか、数百万倍ものスピードでの進歩の発展

をとげてきた。それに幻惑され、かつ毒されてしまつて、人間は自分も知らず、人も知らず、世界中が我欲に狂奔して、意識的・無意識的に大切な自然を破壊しつづけているのである。

丘を崩し、山を削り、川を埋め、森林を伐る。豊かな大自然が育くむ樹林は尽きることなく清冽な生命の水を生み出すが、その樹林を伐採し、リゾート計画と称してゴルフ場を作り、別荘地を濫造する。わずかに残された自然も、開発の美名にかくれて日に日にそれは蚕食されて行く。

水がなければ生物は生きて行けない。だが人間は自らをも育くんでくれるこの水を枯渇するまで汲み上げ、地上の緑を絶滅させる。あぐくはその水を廃水として垂れ流し、川を汚し、海を汚す。あらゆる内燃機関の排ガスと低開発国の焼き畑農耕の煙も、石油工場の排煙と核実験による死の灰とともに大気を汚染して止どまらない。

人類はその発生と同時に自然を破壊し、荒廃させ、他の生物を絶滅させてつづけてきた。人類をのぞいてこの自然を荒らすものはない、このためかつて地球上に生を謳歌していた植物・動物で絶滅した種、さらに絶滅に瀕しているものは枚挙にいとまない。それをなすことが人類の進歩・発展であり、万物の霊長としての権利なのであろう。

海外の山

ツエルマットのガイド問題

夏山シーズンを前に、スイス・アルプスのツエルマットガイド組合の日本人ガイドの入山締め出しが話題となっている。

日本アルパイン・ガイド協会の話によると、この起りは、昨年八月、マッターホルンで起きた日本人登山者の滑落事故にさかのぼる。事故処理で現地に向いたジュネーブの日本領事館員らに、ツエルマット警察から日本人ガイドがマッターホルンなどワリス山群でガイドするのは州法に違反するので、取り締まると言われたという。

以後、何度か現地で、また手紙によるやりとりを通じて交渉が持たれ、一時は、日本側の窓口を一本化するのと、日本人ガイドの集客は日本だけで行ない、現地ではないこと、現地ガイドとの協力でガイド行為をすること、などを条件にガイド行為が認められる方向に話が進んだ。

しかし、十二月に開かれたツエルマット・ガイド組合の総会での雰囲気は、厳しいものだった。日本人ガイドの活動に一部のガイドたちは激しく反発、州法の規定通り、当面受け入れられない、との意向が二月になって正式に文書で伝えられた。

マッターホルンやモンテローザなどの秀峰をかかえるワリス州の法律では、山岳ガイドのできる者は、スイスのガイド・ライセンスか、インターナショナル・ライセンス

ンスを保有する者に限られている。法を変えることが簡単でない以上、日本のガイドもできるだけ国際ガイド連盟(U I A G M)に加盟し、インターナショナル・ライセンスを取得してほしい、とスイス側では伝えてきたが、そのために必要な山岳ガイドの国家検定制度が日本にはなく、当面事態の早期解決は期待できそうにない。

話は変わるが、昨年一年間海外へ渡った日本人旅行者の数は、前年を百六十万人上回る八百四十三万人に達した、と五月二十三日発表の「六十三年度観光白書」が報告している。

「エンダカ」に慣れきったわれら、豊かな日本人にとっては、ああ、そんなものか、とさして感慨もないかもしれないが、海外渡航が自由化された一九六四年当時(十三万人)の六十四倍、と聞くとこれはやはり凄いことである。

山の世界でも市民の「海外の山」が、随分一般的になった。時間が十分取れないのと、言葉の問題もあって、「○○さんと一緒にアルプスを登ろう」式の山登りが結構人気と聞く。マッターホルンなども、恰好の対象の一つだっただろう。地元観光局も日本人の入山自体は歓迎してきたから、これまでは日本人ガイドについても黙認の形だった。

それが、一転硬化した背景には、地元ガイドには日本人ガイドの「荒稼ぎ」とうつる情景、つまりツエルマットのガイド組合のいう「山小屋で客を待ち、繰り返し山を登る行為」が目撃されたことがあったらしい。

山岳ガイド、という日本ではまだ個人の志向で進められているように見える職業が今後どんな位置づけをされていくのか、海外登山の大衆化と共に気になるところである。

(江本嘉伸)

か。そこには荒々しく、禍々しい弱肉強食のエネルギーは感じられるが、人類だけが持つ、精神的所産である文化のかけらも見受けられない。

いまや、日本のみならず、世界中にかつての美しい太古のままの自然はなくなつた。地表を覆っていた緑の大森林は往時の二〇〜三〇パーセントに減少し、いまなお、日本の九州・四国を合わせた以上の面積の緑地が一年間に失われつつづけている。

水とならんで生物の生存に不可欠な酸素はこの緑地を形成する植物から生み出されていたが、いまは当然、大幅にその発生量は減少し、現在、生物生存の絶対量ぎりぎりの線を海藻からの供給に頼っているありさまだ。そして、その海洋もしだいに汚染されつつある。さらには地球上の淡水の四〇パーセントを保有する南米アマゾン河、その流域の大規模な伐採計画進行も地球破滅へ拍車をかけているといつてよい。

私はこうした自然破壊や汚染、それによる緑の減少こそ、ここ十数年来の汎地球的な異常気象の本当の原因だと考えている。樹林や緑地の減少、絶滅。これによる地中水分保有のバランスの狂い、大気中の水分供給過剰現象、フロンガスの成層圏破壊による宇宙線増加、排煙その他の微細塵による太陽光

海外の山

困難な登山をする者の

危険と死との関係 (3)

〔この記事は四年前に「ディ・アルベン」に載ったもの。訳は岡沢〕

生命強化剤としての、近くにある死

「しかし、私が危険に陥つたらすぐに、そしてもしその時、ふたたび健康で元に戻れたなら、命はその時だけでなく、それから先も財宝としての実感を持つのだ。」(オイゲン・ギド・ランマー『若返り』)

「私は谷よりも山で、よりいっそう命というものに関わっていることを知っている。危険な山行をしている人が命に煩わされなれないといった場合を私は知らない。」(ライホルト・メスナー『限界領域—死の地帯』)

「われわれが求めているのは、死の深淵を下に見ながらの長い登攀の後、生命が両手を広げわれわれを抑えつけようとするときの、心おどらす、あの束縛のない心底からの至福感であり、それはわれわれの本質的なものの全てを満してくれるのだ。」(リオネル・トレイ『大いなる山旅』)

▼死への無関心

「今、頂上へ? どうかしってるんじゃないか? 最終キヤンプは一一〇〇以下にあり、われわれは夜ここへ登ってきたのだ! しかし、私の前をヘルマン・ブルは歩いていく。彼はかつていちど八〇〇〇で夜を明かしたことがあった。なぜ今夜はそうしないのだろうか? あのととき彼の運が良かったのは確かに偶然だったのだ。そんな幸運を彼と私がふたたび得られるだろうか? そして、もしそうでなかったらどういうことになるのだろうか?」(クルト・ディームベルガー『頂上と仲間たち』)

▼もし山で死に直面すれば、われわれは抵抗する。

「しかし数回行くと真ッ青になった。その割れ目と私の間にある岩には大きな切れこみがあり、奥深くえぐられ、巨大な貝がらの内側のようにつるつるだった。この貝がらの周りの、目にはいったところにあるものといつたらオーバーハングとつるつるのスラブ、何もない空間——アルプスで見る夢のような所だった。引き返すルートはどれも切れ切れで、登ることも、降りることもできないのだ! 私のいる割れ目からちょうど十二メートル離れた。十二だだ!

その深みを飛び越えることはできない。絶望感が襲つた。肉体的にも精神的にも消耗し、少なくとも一時間、われわれ——ルックザックと私を、この恐ろしい孤独感のなかで支えていたこの唯一のハーケンにすがりつき、良い考えもないままに留まっていた。しかし、死が僅かだと分かると、人間としての反発力が思っていた以上に強まった。私には段々と力が出てきた。五日間、命を賭け、全力を尽くしたなら、何もせず最後を待つようなことには少なくともなるまい、と私に言い聞かせた。何れにしても希望の火が私のなかに再び燃え上がった。運命に自分を任せようといった新たな力を私は見つけた。この冒険に参加したとき委ねた運命だ。」「冒険的な、全力でやってみようといった方法が彼を救っている。」(ワルテル・ボナツティ『山—わが山々』)

▼絶望(意気阻喪)から来る危険

「長い晴れの週が続くツェルマットの暑い夏が始まった。これからは私の思いのままの年だ。胸のなかで真ッ赤に燃え上がっている欲望はアルプスでの行動と、消しがたい死の危険にたいする渴望だ。私が心に決めていたのは、いちばん高いところへ行くということ、壊れたストックのようにいつでも命を投げ捨てるということだ

海外の山

線の遮断、炭酸ガス増加が原因となる輻射熱効果、これらもろもろのことが因となって、地球本然のサイクルが狂ったのである。

こうしたことから私は、ここ二十数年来、ずっとこのことを訴えつづけてきた。だが、悲しいことにこうした、自分に直接関係しないことがらに耳かたむける人はまことに少ない。現在もその一環として「日本高山植物保護協会」設立のため、有志と語らい、一所懸命はたらいているが、同様にこれも遅々として進まない。

四季に恵まれ、南北に長く分布する日本の山地に生育する高山植物は約六〇〇種、その形態も多様であり、氷期遺存植物として世界にも稀な種が少なくない。その独特の進化の過程と形態は学術上貴重な存在であり、人間の進化・遺伝にも密接なかわりがある。

ところが、その貴重な高山植物を盗掘・盗採し、販売したり、植木仕立てにする人があつたのを絶たないのである。

こうした心ない人たちが、それは山草愛好家を自認する人の中にも多く、自分で山地から盗掘・盗採する人も枚挙にいとまないのである。業者の中には人に依頼したり、自分で出かけたり、最近では林道が奥地まで延長されたのを利用して、自動車を使って大規模な盗掘・盗採をする。それを自分の畑に移

した。それはあの危険への渴望といったものよりもずっと深いところにあるものだった。しかし、ここにはそれを説明するだけの充分な紙幅がない。ただこれだけは言っておきたい。奥深い自然の全てが八、九十年の間に被害をうけた。それは人間のせいであり、この人間性の退廃とそれに対する恐ろしいほどの懷疑が、私の若い心に重くのしかかっているのだ。」(ランマー「若返り」)

「われわれの狂気の試みに先だって言われていた全ての悪口も、そのときはもう私の心を動かさなかった。この一年來、私の存在を最後の所まで追ひこむ用意をしてい

植し、あたかも栽培したかのようなかたちをとる業者もある。さらに県の林務や営林署、本来は高山植物を守らねばならない立ち場の人間の中にもこれをおこなって業者に卸したりする人間がいるにいたってはまったく何をかいわんや、という気にさせられてしまう。

高所以外では生育しないこれらの植物は、やがて草丈、木丈が高くなり、花が小さくなって行き、枯死する。するとそうした人たちは、また新たな盗掘・盗採をし、また業者から購入するのである。

それを何とか防止し、保護を加えようと、昭和六十一年に山梨県で制定施行された「高山植物保護条例」を抛りどころに、この「日本高山植物保護協会」設立の運動がはじまったのである。私たちの願いは、この運動の輪を大きく日本全国にひろげて行き、やが

た。」(メスナー「エベレスト」)

▼通常の(徐々にくる)死についての不安

「いや、長い薄明かりより一瞬の輝きのほうが良い! 死んでいくなら心のなかに太陽を抱き、それに触れてるほうが好きだ。喜んで死んだひとと永遠の道遥に向かうほうが良い。いつも恐怖の薄明かりのなかで不安そうに身を屈め、命を終らせるよりは。」(パウル・ヒューベル「案内人抜き登頂」)

「ウルリッヒ・アウフムート

「ディ・アルペン」(一九八五年)より」

海外の山

戻す一番の近道ではないかと考えるのである。

この太古から生きつづけてきた小さな花々、この山の花ひとつを守り得ずして何の登山家、何の自然愛好家、何の山岳会、何の文化国家といえようか。

緑と水の美しい星に還る原点として私はこの運動をさらに推しすすめて行きたい。ともに手をたずさえ、この美しい生命をわれらの後世に伝えようと考える同志のご賛同を期待する。

高山植物保護協会に入会御希望の方、関心をお持ちの方は、左記に資料を御請求下さい。

〒400-14 山梨県御坂町成田九二〇—

三

日本高山植物保護協会事務局

橘田友春

第6回国際低酸素症

シンポジウムに参加して

中島道郎

二年毎に、カナダのバンフに程近いレイク・ルイーズで開催される、国際低酸素症シンポジウムという学会は、十年前、チャールズ・ハウストン先生によって創設され、今に至っているものです。「国際」学会にしては規模は小さいものですが、内容的にはどんな国際学会にも決してひけを取らない豪華なものです。

「低酸素症」シンポジウムなど一般論的に命名されていますが、本質は高所医学そのものです。そして、それに関連する世界中の有名学者、例えばJ・ウエスト、H・ハルトグレン、J・セヴェリングハウス、P・ハケット、M・ウオードなどなど日本でもよく知られている先生方が集まります。世界中から二七〇人、日本からも十八人が参加しました。

二月二十二日から二十四日までの三日間は「低酸素症」に関するシンポジウムで、高所住民とか鳥類の、呼吸生理学に関する問題、或いは非常な低酸素環境下におけるガス交換の問題等、かなり基礎医学的なテーマを中心に討議されました。我々にとって興味

深かったのは、最後の二十五日、「登山医学の日」と銘打った一日で、高所脳浮腫・肺水腫、高山病に対する薬物、高所における筋肉と心臓、などのテーマで朝の八時から夕の六時迄延々と議論が続いて、聞いているだけでも随分ためになりました。

このシンポジウムがほかの学会と違ってユニークな所は、午後は四時間スキー・ブレイクがあることです。ホテルの周りの森を巡るクロスカントリーなり、近くのスキー場でダウンヒルなり、或いは湖でスケートなりそれぞれに時を過ごします。もう一つユニークなのは、九時から十一時迄「夜の部」があつて、これがまた楽しいひと時なのです。二十二日は、カナダから北極を通ってソ連まで、スキーで歩いて横断したグループの報告があり、二十三日は、一九八二年ソ連エヴェレスト登山隊の隊員選考テストと登山の記録映画がありました。日本では想像もつかない程の過酷なテストの挙句に隊員が決められる、その様子が大変印象的でした。

二十四日は特別の夜でした。今回を

もつてこのシンポジウムの『会長』を退くことになったハウストン先生の「退任式」が開催されたのです。記念品贈呈に続き、スピーチがあり、私は第二番目にスピーチさせられました。このことは、このシンポジウムに於ける日本の先生方の貢献度を反映しているものとして評価して頂きたいと思います。

さて、このようにユニークなシンポジウムですが、次回は一九九一年二月

二十六日から、三月二日迄、同じくこのレイク・ルイーズで開催されます。大変楽しい愉快な学会です。どうか皆さん、多数ご参加下さい。医者である必要はありません。詳細はまた、その時になったら、本紙を借りてお知らせしましょう。

日本山岳画協会

本年度展御案内

●東京展

◇7月9日(日)～15日(土)

11:00～18:30

(日曜、最終17:00)

◇朝日アートギャラリー

JR有楽町・地下鉄丸の内線銀座中央区銀座4-100(朝日旅行センター隣)、電話・03・5335・7740

◇会員の作品約20点陳列します。

●長野県大田市山岳博物館展

◇7月23日(日)～8月27日(日)

◇会員の作品大作50点陳列します。

◇〒398 大田市神楽町8508

電話・02612・2・0211

●南アルプス広河原展

◇7月1日(土)～11月5日(日)

◇アルペンプラザ広河原

(山梨県中巨摩郡芦安村広河原) 主催・芦安村、電話・0552・83・2889

◇会員の作品約20点陳列します。

●山岳画協会事務所・〒178

東京都練馬区東大泉6-12-15

(電)03・922・6670

藤江方

会員アンケート結果報告 (1)

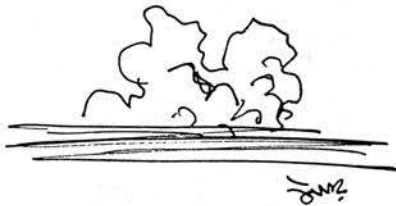
当会では、さる二月の理事会の決定に基づいて、全会員を対象としたアンケートを本年三月に実施しました。このアンケートは、会員の皆さんの構成、意向などをひろく調査し、会の長期的な改善計画づくりや年度事業計画作成などの基礎資料として大いに有効活用するため企画されたものです。

この種の会員アンケートは過去二回実施されており、昭和四十七年は回答率三二%（発送数二、三六四、回答数七六六通）、昭和五十八年は回答率四五%（発送数三、九〇〇、回答数一、七五五通）を記録しています。今回は会員の皆さんの参画がさらに進んで、回答率は五一%（発送数四、四四二、回答数二、二五一通）という高率に達しました。会員の半数の方がお答えを寄せて下さったことになり、会員の意識の高さ、改善意欲の強さを端的に物語っていると言えましょう。

アンケートの設計に当っては、①会の長期的な改善仮説の検証に役立つこと、②前回のアンケートと時系列分析のできる設問は踏襲すること、③増加した新しい会員（在籍五年以内の会員が四分の一を占める）の動向を把握す

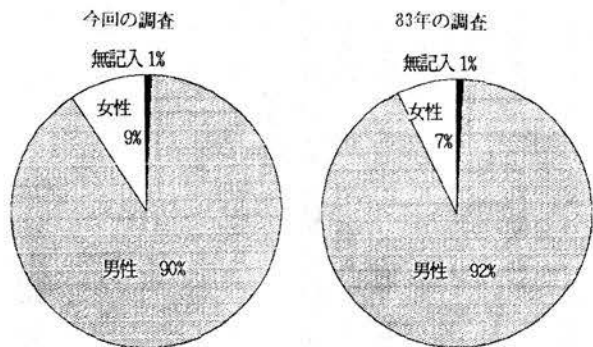
ること、などが特に留意されています。したがって、「以前答えたことを何故また聞くのか？」とか「登山の体験など初歩的なことをなぜ聞くのか？」というような疑問をお持ちになった方もいると思いますが、前記の①②③の事情によりますので、ご了承ください。

二、二五一通のアンケートは、コンピュータを利用して種々のクロス集計による解析が行なわれました。そのベーシックな部分についてこの紙面を借りて以下報告します（文責 西村政晃、作図 小林政志）。



1. 性別

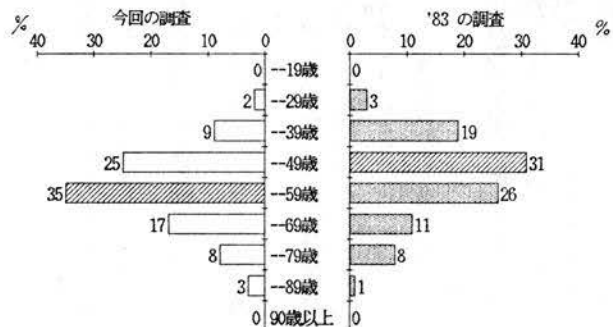
女性が 9% を占め、前回（'83）に比べ 2 ポイント増えている。



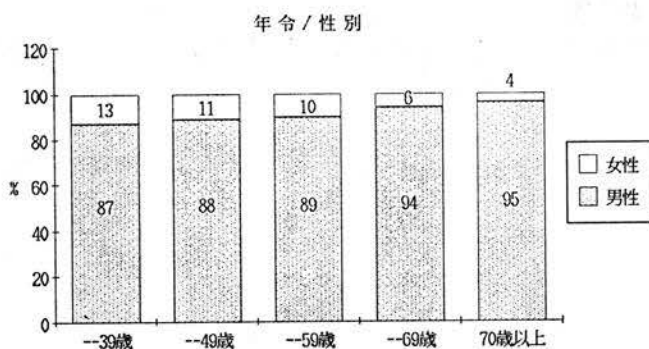
2. 年齢

40 歳以上で 88% を占めている。10 代 20 代の若い人は僅かに 2% しかない。

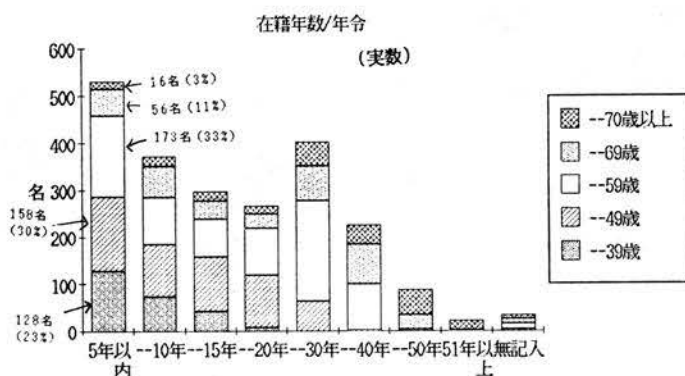
前回に比べ 10 代 20 代が 1 ポイント減少し、50 代 60 代が顕著に増えている。



年齢階層が若い程女性の構成比が高い。

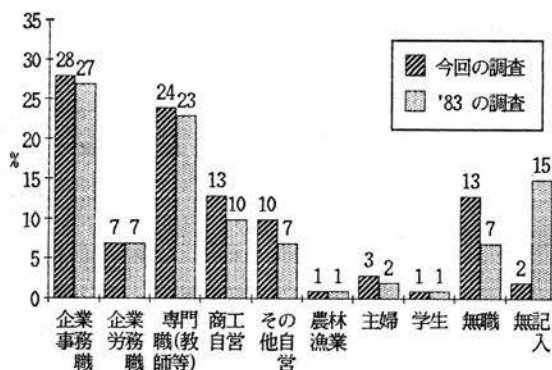


在籍5年以内の会員の年齢構成は39歳以下が23%, 40歳以上が77%を占め, 近年の入会者の年齢が高いことを示している。



3. 職業

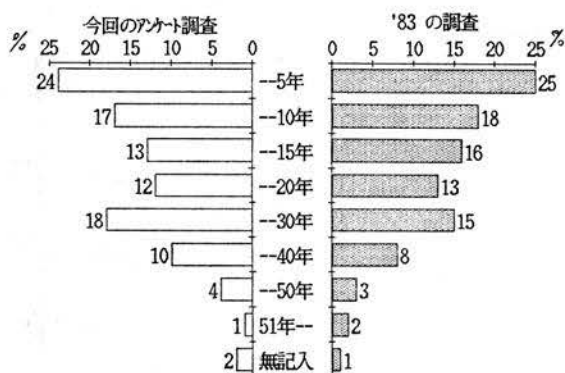
職業としては「企業事務職」「専門職(教師等)」が多く, この二つで52%を占める。



4. 在籍年数

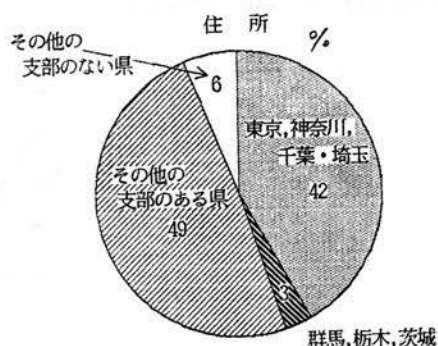
在籍5年以下の新しい会員が4分の1, 一方, 21年以上の会員が3分の1を占めている。

在籍年数の構成は, 前回と大きな差は見られない。



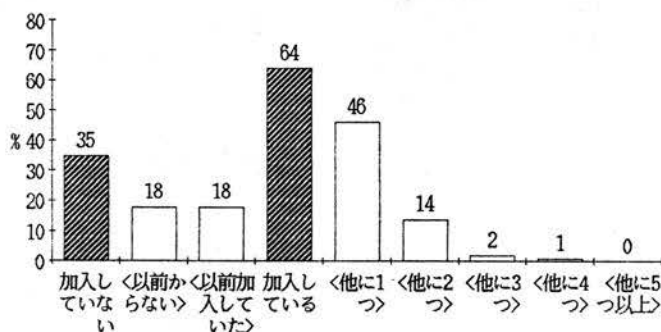
5. 住 所

関東地方の居住者が45%, その他の地域の居住者が52%を占めている。



6. 他の山岳会への所属

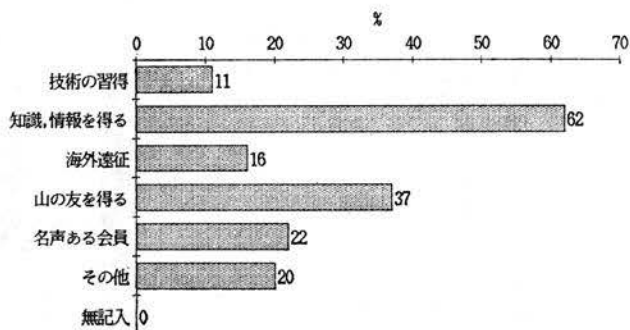
他の山岳会への所属者が64%, 非所属者が36%を占めている。



7. 入会動機

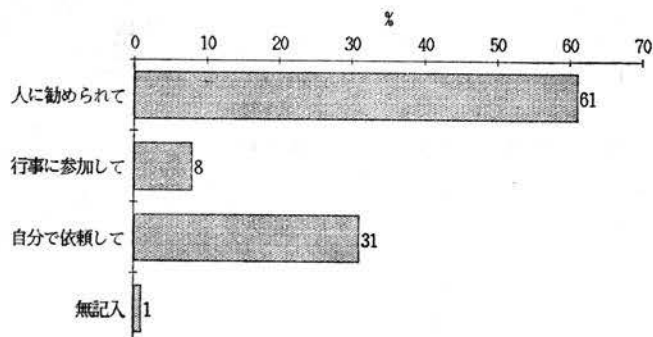
(M・A)……複数回答(以下同じ)

入会動機は「知識, 情報を得る」が62%と第1位, 「名声のある山岳会のメンバーになりたい」という動機が第3位に登場する。



8. 入会のきっかけ

入会のきっかけは「人に勧められて」, 「行事に参加して」の二つで69%を占め, 受け身の入会が多いことを物語っている。



(以下次々号)



図書
紹介

極楽トンボ・

ヒマラヤに眠る

水越英隆^{ひでたか} 追悼集

水越久美子編

「極楽トンボ」とは、本書を作った奥様の久美子さんが、生前の水越君に奉った愛称である。ひとから見れば全く意味のない、危険と隣り合わせの山登りにうつつをぬかし、世事に無頓着な快男児にとって、これに勝る绰名もあるまい。

水越氏は、一九八八年のチョモランマ峰交差縦走三国友好登山隊に南側(ネパール側)隊のドクターとして参加し、四月二十一日ベースキャンプ(五三三〇^{メートル})の天幕の中で「くも膜下出血」のため急死された。享年四十八歳。

氏は富山県に生れ、金沢大学医学部卒業、脳神経外科を専攻し、後に富山市民病院に赴任した。山岳遭難者の救命のため病院屋上にヘリポートを作る

うと決意し、各方面との二年間に互る折衝を重ねて、遂に目的を達した。我国最初の試みであった。このため患者が剎岳から十五分で着き、完璧な治療が可能となった。学生時代は山岳部で活躍し、医師となつてからは立山連峯の剎沢と雷鳥沢に開設される夏期診療所で登山者の救護を毎年行なつた。一方、文部省登山研修所(立山千寿が原)の専門調査員として、受講者の教育(高所医学)、研修書の編集等、研修所の運営に力を尽した。その間、海外に遠征し、一九七五年にカラコルムのK6(七二八二^{メートル})、一九八四年はネパールのガウリ・サンカル(七一四五^{メートル})に登つた。

本書に寄稿した故人にゆかりの人々は、いづれも故人の難局に処して決断力の速きことと共に、底知れぬ親切と朗らかな性格を慕っている。異色なのは高所医学の根本ともいうべき学位論文と、死後カトマンズに急行して現地で病理解剖を行なつた我国病理学者の精細な報告全文が掲載されていることだ。多数のカラー写真が美しく錦上更に花を飾っている。

それにしても惜しい人を亡くしたものである。高所医学の将来を双肩に担う前途有為の学徒と見られていただけに、その損失は我国にとって測り知れない。謹んでここに哀悼の意を表し、

好評発売中

漢字
百話
山・やま事典

監修・近藤信行

「山への讃歌」。自然を愛する人々に贈る『文字と言葉と写真』でつづる山の百話。



※印のものは消費税が加算されます。

●山名山字●山字博覧●山の話・諺●山文・字考●山の文学●山文字姓名と家紋●山の用語集●山の神話・伝説・俗信●他
カラーおよび2色刷・写真・イラスト・図版など多数使用
体裁 B5判・並製・160ページ
※1,800円

大修館の山岳図書

内容見本呈

覆刻

日本の山岳名著

日本の近代アルピニズム史上に燦然と輝く不朽の山岳名著
企画・編集 日本山岳会

全18点22冊付
特別資料1

新選

日本の山岳名著

企画・編集 日本山岳会

全20点29冊付
特別資料2

図説

山岳の世界

Nディレンファース・T・ヒラー他著 日本語版監修 西堀栄三郎・宮下啓三
上製函入・310頁
※18,000円

遙かなりエヴェレスト―マローリ追想―

島田 巽著 四六判・フランス装・292頁 ※1,500円

大修館書店 〒101 東京都千代田区神田錦町3-24
☎(03)294-2221(大代表)

御冥福を祈る次第である。昨年九月故人を偲ぶレリーフが剱沢小舎上の岩壁にはめこまれたことを付記する。

平成元年三月二十一日発行、一六二ページ、非売品、ルーム図書室備付け (河野幾雄)

家族ハイク・

九州北部の山

足利 武三 共著
井上 優

最近の静かな登山ブームの特徴は、短小軽薄なハヤリ現象的なものではなく、熟年層が小グループで近郊の山に登っている姿であり、いかにも素人っぽい家族づれの姿である。本書は、まさに、その様な登山者層にあわせたように、近郊の山をしみじみと味わう重厚さが漂うようなガイドブックに仕上がっている。九州の山をこよなく愛した写真家とジャーナリストの面目躍如といった息のあった傑作である。他に見られない特徴としては、「一口メモ」という項でその土地、麓の社寺、山の故事来歴を専門的にしかも簡潔に紹介している点である。熟年層の登山者の好み、興味関心にこたえ、まさにそのニーズにあったガイドブックになっている。

まず、山の概観的介绍がある。含蓄のある解説と位置、方角、土地勘を踏

まえた説明が要をえている。次にコース別のルート描写があり、歩く道順にそつての視覚的描写がすばらしく、ルート風景が目につくようである。また、各ページにカラーで入っている写真は、つとめて人間がいる風景になっている。そのことがガイドブックの雰囲気や温かいものにしていてほえましく親しみやすいものになっている。ガイドブックにありがちなやぼったさがないのは、文章のきれもさることながらこのカラー写真のいぶきがあるものについている。

総体的に「読む山の本」として重みのある楽しい本である。自分が最近登った山、今まで登った九州の山々の「一口メモ」の項などを確かめるようにして読んでみたいと思うような本である。

装丁、製本も堅牢なものでリュックの中で採まれても十分耐えられる物になっている。

一九八八年十一月十日、西日本新聞社刊、百六十ページ、定価千五百円 (福岡支部・中嶋正一)

西望祁連

福島高校山岳部OB会編

福島県立福島高校山岳部と聞けば、山岳部を指導した佐藤善純先生のこと

を思い出す。先生の指導した山岳部のOBの人達により、中国・祁連友好登山隊が登頂に成功し、立派な、西望祁連を読ませて戴き非常に嬉しく思います。

一つの高校山岳部OB会が海外登山を行なうことが、いかにむずかしい大事業であるか、いかに学校、同窓会、地元の新開社、地元の有志の人達の厚い協力がないと出来ないか、よくわかる。成功され、立派な報告書のできたのも、多くの人達の協力によるもので、表紙、豊富な写真、計画から出発まで、行動の記録、各担当の反省とよくまとまっているが、一番気になったことは、隊員のトレーニングの方法で、基本的、雪上訓練、氷壁登はん技術などは充分に行なわれ目標以上のものがあるが、高山に対する高度順化の訓練が、富士山二回では不足ではないかと思つた。遠征を終えての項に、高度障害のこと、健康管理のことが書いてあり、適切な判断でルートを変更して成功したことは何よりでした。

堅い報告書の中で、気楽で面白く書いてあったのは、こぼれ話で、登山の前後で、チベットの牧民や地方都市の子供から婦人まで、ポラロイドカメラの撮影で、日中友好の橋渡しになり、女性との語り合いもフィルムの切れ目が縁の切れ目、大好評とか、悲しい病で

ジツと我慢するジ病など実に面白い。又報道人における国際感覚と、前歯の重要性のことや、白酒は高粱(こうりゃん)を主原料として蒸留酒で、中国各地で製造されて、その発酵のさせ方が独特であるなど、酒の好きな私など面白く読むことができた。

その外では、中国入山について非常にこまかく紹介しており、非常に役に立つと思う。

一九八九年一月一日刊、一四二ページ、福島県立福島高校山岳部OB会発行、非売品

(中 保)

ロックス・

アラウンド・ザ・ワールド

シュテファン・グロヴァッツ
ウリ・ワイースマイアー 共著

山と溪谷社訳

本をひらく前に、書名から若いクライマーなら音楽の響きを聴くかもしれない。その通り、グロヴァッツのクライミングは舞うように華麗である。これはフランスはヴェルドンの谷から始まって世界を巡るフリークライムの写真集。

いやいやこれはパフォーマンスで登山ではない、岩登りですらないと言う声が聞こえてきそう。確かにここにはヒマラヤもアルプスも、パフィンや

パタゴニアのビッグウオールもない。しかし華やかな写真に添えられる短い文章には、思いのほか健全なクライミング観が語られている。サラテルートのフリークライムを前にしての高揚と不安、敗北。オーストラリアでの初登攀、彼は解き放たれて空の青の中に融けこんでゆく。そして時に、自分が自然にもあそばれる水滴にすぎないと感じたりする。ここには一人の登山者の初初しい心がある。

ウリ・ヴィースマイアーの写真はたいへんに美しく、グロヴァッツのクライムと相俟って時にシュールレアリスティックですらある。

登山が専門化し尖鋭化したと言われて久しい、登山はいったい何処へ行こうとしているのかと感じている岳人も多い。ここにその一方の極がある。登るといふ行為を突き動かしているものは何なのか。今、フリークライミングの第一線をこの眼で確めたい人に薦めたい。

そして、写真を眺めて、筋肉がピクンとしたらしめたもの。本を閉じて、小川山や城ヶ崎に遊ぶのがよい。

それにしても、昨秋フランクフルトの書店の案内でもしろうそだと思っ
ていたら同時に日本版が手に入る、便利になったものだ。七八頁の本が翻訳されて日本の方が安いのも、若いク

【自然保護随想】

美しい地球をよごさないで

去る二月九日、マンガ家の手塚治虫さんが亡くなられた。戦中派から以前の世代には「マンガなんて」と一蹴されてしまいうでしょう。実は私もその一人です。

しかし、手塚さんの最期のメッセージである「ガラスの地球を救え」を一読して、氏が地球や自然や人類に対する限りなく深い愛情の持主であったことを知って、認識をあらたにした次第です。

「鉄腕アトム」は、未来の世界は技術革新によって繁栄し、幸福を生むというビジョンではなく、自然や人間性を置き忘れて、ひたすら進歩のみをめざして突っ走る科学技術が、どんなに深い亀裂や歪みを社会にもたらし、差別を生み、人間や生命あるものを無残に傷つけていくかを描いています。また「ネオ・ファースト」は、バイオテクノロジーを人間がいじりまわして悪魔の仕業の領域に踏み込むことへの不安感や拒否反応を表現しました。「火の鳥」では西暦三三〇〇年の地球を想定して、地球が急速に死にかかっている、荒れ果てた地面の下に高層ビルが林立する未来都市を描いています。

恐竜は一億数千万年、地球上で繁栄しましたが、人類は未だ三百万年でしかないのに、人類ばかりでなく、地球上の全生命体の存続か滅亡かの鍵を握っているとあり

ライマーにはありがたいと思われる。

一九八八年十月、山と溪谷社刊、一四五ページ、四五〇〇円

(絹川祥夫)

ます。

このほか、大人にも読んで欲しい絵本では、「美しい地球をよごさないで」——自然保護を訴える七十数ヶ国の子供たちの声——と題して、六歳からティーン・エイジャまでの幼少年が地球や野生動物や樹木や人間や、そして都会や工場の絵・詩・文をのせております。お国がらがちがっても、子供たちの考えていることはみな同じであり、「人間が生きたためなら、何をしてもいい」と言っている作品は一つもありません。地球を愛する子供たちから大人への切実な訴えや、卒直なメッセージが、ヘレン・エクスレイさんの編集で美しい絵本になっています。

視点をかえて、化学者の本では「自然と人為」——公害随想——春日進著が面白いと思えました。自然と人為の調和の書とでもいうのでしょうか。

それにつけても思い出されるのは、四月十三日他界されました西堀栄三郎大先輩のお言葉です。「人間を含み、森羅万象みな大自然や。それを知るのが科学で、知り過ぎることはない。そこで得た知識をどう使うかが技術で、技術者に人倫がなければあかん」。このお言葉が心の奥深く突きささる思いがするのは私ばかりではないでしょう。

哀惜の情、せつなるものがあります。

(麦倉 啓)

次代に残そう美しい山と溪

・山里寿男原画展

―『画文集・道ひとすじ』
及び『山の絵の描き方』
より―

日時 六月二十九日(木)

七月十二日(水)

場所 西武百貨店船橋店

五階美術画廊

・後藤三男油絵展

―信州の山と

安曇野を描く―

日時 七月十一日(火)

十七日(月)

場所 千葉三越・七階特選画廊

報告

本年度

地方ブロック懇談会を

山陰支部で開催

一九八八年度山陰支部総会は四月十五日、ゲストとして石橋正美総務委員長を迎えて開催した。

港支部長の挨拶の後議事に先立ち、石橋氏よりスピーチがなされた。全国

二十一の支部、二十の委員会の現状報告、会の性格、施設問題、役員・理事の任期、山岳資料と図書の利用など、日本山岳会の問題点と二十一世紀に向けてのビジョンが話された。

議事に入り、井上支部事務局長から山陰支部四十周年記念式典を前にした諸活動の計画と現在の取り組みの提案がなされ、秋の全国大会開催へ向け、出席者全員、支部の総力を注ぐことを誓った。

▽主な報告・議事

会計・監査報告、山陰一〇〇山委員会、大山概念図作成委員会各報告、予算、テレホンカード販売、広告募集。

▽本年度主な予定

六月二日・五日 高千穂峰山行

八月「山陰一〇〇山」、「四十周年記念誌」刊行

念誌」刊行

一〇月二八日・二九日 山陰支部四十周年記念全国大会

一二月九日 支部晩餐会

五月、七月、八月、九月、一月、二月、三月各例会

(長田)

婦懇・青懇・指導委共催

春山スキー

三月二十五日・二十六日、婦懇・青懇・指導委共催の春山スキーが磐梯山系猫魔岳で行なわれた。

今年もさげん会で会いましょう

前夜、小雨降る新宿から夜行バスに乗り、早朝猫魔スキー場に到着。天気予報どおり、風が強く、雨を含んだ春の雪が舞い、ガスが視界を遮っていた。宿泊先「野田ペンション」の御主人が案内して下さることになっていたが、無理に行っても何も見えないので中止と決まった。

夜、福島江花さん、笹川さんが合流。笹川さんや会津のおいしいお酒をいただき、遅くまで賑やかに楽しいおしゃべりが続いた。

翌朝は、青空に太陽が輝いていた。福島西関さんもおいでになり、総勢十八名、期待を胸に、出発した。

リフトで頂上に着き、いよいよツアールの開始。グレンデの反対の方向に少し登ると、まったく景色が違っていった。なだらかな広場の先に低く疎な林が広がり、その先に雄国沼、雄国岳が間近に見える。

一列になって滑り出す。昨日とは打って違って気持ちよく滑る。大きく弧を描いて林を縫う。前の人のシュプールを追う。時々止まって皆が集まる。霧氷林の間から見上げる空の青さ。生き生きと顔を輝やかせ、また滑り出す。

沼に着き小休止のあと、雄子沢に向けて出発。少し登ったり、歩いたり混じえながら、ぶな林の中を徐々に降りて行く。この楽しさを終らせたくない、とおしみつつ降りて行く。

小鳥の声、沢の水音を聞きながら、暖かい味噌汁を作り昼食をいただいた。

・会務報告

ツアーの楽しさを満喫して、「また行きたい」「来年も是非計画して」「そのためにはスキー場へ行っても、ゲレンデでなく、林の中を滑べろう」等、わいわい言いながら全員大満足の春山スキーだった。
(須藤節子)

四月理事会

四月十九日 午後六時四十分
日本山岳会 集会室
出席者 今西会長、大塚、村木副会長、
鳴原、西村、新井、鈴木、大森、織田
沢、田部井、勝山、岡沢、小林、松

承認
永、関塚、太田、大橋、橋本各理事。
太田、山本各監事。松田、小倉、山野
井、平林各評議員。
委任 早坂理事
審議事項

(1)昭和六十三年事業報告および収支
決算、財産目録承認の件
西村担当理事より説明の後、太田監
事により監査の結果が報告された。
承認

(2)平成元年度、二年度理事、監査およ
び評議員選任の件
平林評議員より四月五日の評議員会
報告がなされ、鳴原理事より候補者
のプロフィールが紹介された。

承認
(3)平成元年度通常総会提出議案の件
第一号議案 昭和六十三年事業報
告および収支決算、財産目録承認の
件
第二号議案 平成元年度事業計画
(案)および収支予算(案)承認の件
第三号議案 平成元年度、二年度理
事、監事および評議員選任の件
第四号議案 平成元年度除籍の件
第五号議案 議事録署名人選任の件
以上原案どおり承認、通常総会に提出
することにした。

本日の議事の経過を議事録にまとめ
るにあたり、議事録署名人二名を互選
するに決めた。

の結果 鳴原啓佑、西村政晃両氏を選
任した。
報告事項
(1)未来ビジョンの件
村木副会長より四月十二日に行な
われた検討会など現在までの経過説
明の後、西村理事より会員アンケー
トの回答結果の説明がなされ、鈴木
理事より海外山岳会アンケートの報
告が行なわれた。

(2)橋本理事より学生部クスムカングル
隊の事故報告が行なわれた。
また事故処理対策費として会より二
百万円を貸付けしている件も報告さ
れた。

『山日記』休刊のお知らせ

『山日記』は、一九三〇年(昭和五年)の創刊以来、
戦中戦後の一時的な休刊期をのぞき、長く登山者に親し
まれてきた日本山岳会の刊行物です。茗溪堂を発行所と
して市販され、登山者必携の「装備」として広く普及し
た時代もありましたが、いまや従来の形での『山日記』
は、その歴史的役割を終えたのではないかと思われま
す。

その大きな要因は二つあります。一つは、登山界の多
様化、もう一つは、山岳関係情報産業の成熟。いずれも
各種登山の普及と啓蒙期の終焉を告げるものであり、そ
の先導者であった日本山岳会としては、喜ばしい時代の

到来といえましょう。

このような趨勢にあつて、山日記編集委員会としても
『山日記』の存在意義の再考を迫られ、さまざまな試行
をかさねてまいりました。その模索の跡は、この四、五
年の『山日記』の変容を見ればおわかりいただけるでし
ょう。とはいえ、少額とはいえぬ経費を要する定期刊行
物を、模索しながら刊行しつづけるのは、いかがなこと
かと思われまふ。そこで、一九八九年版(五三輯)をも
つて、当面のあいだ『山日記』を休刊することにいたし
ました。

全会員の英知を結集して、新時代の登山者の必携装備
として迎えられる、新しい『山日記』が復刊される日の
近いことを願ってやみません。

一九八九年四月

山日記編集委員会

委員会報告

(3)勝山理事より法政大学ランタンリル
ン登山隊の雪崩遭難の報告が行なわ
れた。

高所 四月六日 三国登山隊シンポジ
ウム パネラー：重広、磯野、山本、
渡辺、相馬、馬場 参加者三十三名
図書 四月八日 山岳図書を語る夕
べ、この一本展

昭和六十三年度受入れ図書：和書九
九六冊、洋書二六四冊

平成元年三月三十一日現在の所蔵図
書：和書八〇六九冊、洋書二八三九
冊

婦懇 四月十五日、十六日の関西支部
共催の伊吹山は参加者五十二名の盛

図 書 受 入 報 告

図 書 委 員 会

平成元年1月分受入図書

1. 秋山恭子 秋山俱子編「ネパール研究ガイド」秋山恭子・秋山俱子 1988 (編者寄贈)
2. シュテファン・グロヴァッツ ウリ・ヴィースマイアー著 山と溪谷社訳「ロックス・アラウンド・ザ・ワールド」山と溪谷社 1988 (版元寄贈)
3. 今泉忠芳著「雑木林の散歩道」勁草出版サービスセンター 1988 (版元寄贈)
4. 福島高校山岳部OB会編「西望郷連」福島高校山岳部OB会海外登山実行委員会 1989 (版元寄贈)
5. 宮城県保健環境部環境保全課編「阿武隈溪谷県立自然公園」宮城県保健環境部環境保全課 昭和 63 (版元寄贈)
6. 白旗朗編「日本の名峰」朝日新聞社 1989 (版元寄贈)
7. 富田弘平著「旅がらすの山」新ハイキング社 昭和 63 (著者寄贈)
8. 大成高等学校山岳会編「ネパールヒマラヤ・メラピーク登山報告」大成高等学校山岳会 平成 1 (大関保氏寄贈)
9. 山村民俗の会編「あしなな 6-9 巻」名著出版 昭和 56-57 (購入)
10. 鈴木盛彦著「わが山行」鈴木盛彦 昭和 63 (著者寄贈)

2月分受入図書

1. 西田立著「燃えよ岳人」西田立 昭和 63 (著者寄贈)
2. 橋本廣著「とやま雪山あるき」桂書房 1989 (版元寄贈)
3. 佐伯邦夫著「スキー・ツーリングに乾杯」山と溪谷社 1989 (版元寄贈)
4. 五百沢智也著「最新地形図入門」山と溪谷社 1989 (版元寄贈)
5. 日本体育図書館協議会雑誌目録編集委員会編「日本体育図書館協議会雑誌目録と文庫 第2版」日本体育図書館協議会 1988 (版元寄贈)
6. Graham Bishop "The Mount Aspiring region" New Zealand Alpine Club 1976 (版元寄贈)

3月分受入報告

1. 安藤昌宜・片山重勝編「山脈・人脈」東京都山岳連盟 平成元年 (版元寄贈)
2. 鴨井信政著「チベット・エベレスト・ネパール」シビナ国際文化研究・交流会 1989 (著者寄贈)
3. 色川大吉編「チベット曼荼羅の世界」小学館 1989 (東北大学西蔵学術登山隊実行委員会寄贈)
4. 横浜山岳会カラコルム登山隊編「チリン・西峰」横浜山岳会カラコルム登山隊 1989 (版元寄贈)
5. 東京農業大学農友会山岳部編「1989 年度春山合宿」東京農業大学農友会山岳部 1989 (版元寄贈)
6. 塚本圭一著「自然活動学」森林書房 1989 (版元寄贈)

況であつた。



(4月)

3日	総務委員会
4日	山岳地図講習会Ⅲ
5日	評議員会
6日	シンポジウム「三国登山タクトイクス」
8日	山岳図書を語る夕べ
10日	監査
12日	未来ビジョン検討会
13日	資料委員会、学生部総会
14日	図書委員会
17日	総務委員会
19日	理事会、評議員会
20日	フィルム委員会、三水会
21日	科学委員会
25日	自然保護委員会、会報委員会
26日	山研委員会

4月来室者388名

会員異動 (4月)

物故

佐藤 耕三 (四七六四)	4
西堀 栄三郎 (一一三六)	4
山田 昇 (八六五五)	2
仲西 政一郎 (二二一九)	88
退会	12
藤田 力夫 (八〇九〇)	23

訂正 3月号会報6頁「一枚の写真」の記事で、川崎利兵衛門氏を山と溪谷社の創立者としてありますが、これはハイキング社の小池利兵衛氏の誤り、また菅沼辰太郎とあるのは菅沼達太郎氏の誤りです。従って写真説明の名前もこのようにご訂正下さい。

会報4月号11頁の追悼文の筆者を中村純一としてありますが、これは中村純二氏の誤りですので、合せてご訂正をお願いします。

編集後記 新年度からは小倉厚新理事が会報編集代表になりますが、仕事の関係などで少し遅れます。

私が会報編集を始めたのが十年前、皆川完一氏がやった一年を除くと、九年余り続けたことになります。

考えてみると、大勢の会員諸氏の有形無形の声援や協力がなければ続きませんでした。感謝です。(岡沢祐吉)

平成元年六月二十日

102 東京都千代田区四番町五―四
サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 岡沢祐吉

電話 東京(廻) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社 技報堂